

---

# 迷子の竜、都に行く

黒辺あゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷子の竜、都に行く

### 【Nコード】

N8817T

### 【作者名】

黒辺あゆみ

### 【あらすじ】

一族の引越しの最中に親の背中から落つこちで、人間の少年コニーに拾われた竜の子ポチ。コニーの怪力に命の危機にさらされながらも、ポチは比較的平和な飼い竜ライフを楽しんでいた。そんな一人と一匹は、都に行くことになりました。しかし何事もなく済むはずもなく・・・？短編「迷子の竜の冒険記」の続編です。

## 魔術師がきた 前編

Sideコニー

ポチがやってきてから毎日が楽しい。

その日は暑かったので、ポチと裏山の泉まで泳ぎに行ってきたところだった。最初泳げなかったポチも、今では得意な泳ぎは犬かきである。

「おいしいねえ、ポチ」

「うむ、りんごのパイが一番だが、このモモのタルトも美味である！」

キユー！と元気に尻尾をふりふり答えるポチは、口の周りを食べかすで汚している。竜の威厳台無しだが、こんなおマヌケなポチがコニーは大好きである。少しふっくら気味のポチのお尻のあたりが撫で心地がよいのを気に入っているコニーは、ポチを膝にのせてお尻を撫でている。前みたいに太りすぎて飛べなくなっては可哀相だが、ちよつとぼつちやりしていた方がいいなと思っているコニーであった。

そんな平和なおやつ時間に、コニーの家の様子を伺っている不審者の姿があった。よれよれの外套にくたびれた靴。たまに村に現れる、迷い旅人がちよつとこんな格好である。しかしその不審者は、目をぎらぎらと輝かせて、井戸の側で並んでおやつを食べているコニーとポチを見ていた。

「おお、あれはまさに・・・しかしちよつと・・・いや、でもそれはまた・・・」

そんなことを小声でブツブツ言っている不審者は、木陰に隠れてコニーたちからは見えないうちにしていた。だが、その姿は隣の家の敷地からは丸見えであった。

「おうい」

「ブツブツブツ・・・」

隣の家の主人が不審者に声をかけるも、本人まったく気付かない。

ブスッ！

「アウウッ!?!」

仕方ないので、ちょうど手に持っていたクワで尻を突いてやると、不審者はその衝撃で飛び上がった。優しく突いてやったつもりだが、ちよつと痛かったのかもしれない。

「おめー、ひとんち覗いてなあにしてるんだ?」

「なにをつ、私は、この家の、関係者だ!」

尻をかばいながら弁解する不審者。

「怪しいやつはみいんなそう言うんだあ」

「本当だっ!」

そんな騒ぎを聞きつけて、コニーとポチがやってきた。

「どうしたのお?」

「むっ、泥棒か?」

キュー、と鳴くポチに対して、

「泥棒とは失敬な!私は都の魔術師だ!」

不審者は胸を反らして身なりを整えるも、外套も靴もよれよれでどうにもならなかった。

「まじゆつしい?つてなに?」

「コニー、ペテン師の類だ、相手にしちゃなんねえぞ」

「わかったー。ペテン師さんが来たよつて、とーちゃんに知らせてくる!」

「ちがうわあ!」

すたたと駆けていくコニーに不審者が叫ぶも、コニーは聞いていなかった。

Sideポチ

ポチの一日は過酷だ。

朝起きて、コニーの朝の抱擁に耐え抜く。その後コニーの家族と共

に朝ごはん。そして村の学校へ行くコニーのお供をして村の子供たちにもみくちやにされる。昼ごはんを食べに帰ってきて、外でコニーと遊んで内臓破裂の危機に陥る。おやつを食べて昼寝をし、夕方父親とピートが帰ってくる。家族で夕食を食べて、コニーと一緒に就寝。一日に何度命の危機を迎えるか数え切れない。

子供時代とは、もっと平和なものではないだろうか。それは己の理想でしかなかったのか。他の竜の子は、もっと過酷な試練を受けているのだろうか。ポチは日々思い悩んでいた。

そんなポチが唯一楽しみにしていることがある。それがおやつである。コニーの母親が作るおやつは絶品である。このために一日を耐え抜いていると言っても過言ではない。今日もコニーに何故か尻を撫でられながら、おやつを食しているポチであった。

そんなある日、コニーの家に不審者が現れた。隣の家の主人に見咎められた不審者は、どうやら

魔術師だったらしい。魔術師は都のあたりに住まうもの。都とは、この村からはるか遠くであったはずだ。このような田舎にはるる来るとは、ヒマな魔術師もいたものである。ポチの一族の言い伝えで、魔術師の血は胃腸によいと言われているが本当であろうか。でもよれよれなこの魔術師の血を飲んでも身体に悪そうである。でも一口なめるくらいは許されるのではないだろうか。

そんなことをずっと考えて、ポチはコニーの膝の上から魔術師を見ているのであった。

S i d e コニー

父親と母親がやってきて、不審者なペテン師は、彼らの知り合いであることが判明した。

「兄さん、来るなら手紙でしらせてくださいな」  
母親が呆れた顔で苦情を言った。

「なんだ、ペテン師だつて言うから張り切つたのにアンタかよ」  
父親は少々がっかり気味だった。期待した何かと違つたらしい。  
「・・・都からはるばるやってきた兄を、労わつてはくれないのか  
メリー」  
ペテン師は肩を落としてがっくりした。

不審者はペテン師ではなく、なんと母親の兄であった。

「一度会つたと言っても、コニーは赤ちゃんだったから覚えてない  
わよねえ」

家に招き入れられたコニーにとってはおじさんに、母親は朗らかに  
笑つた。

「ねえ、都つてにーちゃんがいたところ？」

「そうよお、とつても遠いのよ」

ピートは去年まで都の学校に行つていた。そこで仕事を見つけても  
よかつたのだが、やはり自然が恋しくなつたらしい。今では父を手  
伝つて木こり仕事のかたわら、村の学校で勉強を教えている。

「ふーん」

どうでもいいが、さつきからポチがおじさんのことをじつと見てい  
る。何か気になることでもあるのだろうか。珍しい食べ物を持つて  
いるとか。ポチのこの目は食べ物をしたときの目である。

「おじさん、何かおいしいもの持つてない？」

「は・・・、土産か？持つてはきたが食べ物ではないぞ」

困つたようにおじさんが言う。

「こらコニー、食い意地が張つてるぞ」

父親がコニーをたしなめるが、それに不満そうにコニーは頬を膨ら  
ませる。

「ちがうよお。ポチがものほしそうにおじさんを見てるからさあ。

何か持っているのかと思つて」

「うむ、魔術師の血は胃腸に良いとされるが、本当かたしかめるチ  
ヤンスであるからして」

キユーキユー、と鳴くポチに、おじさんは嫌そうだ。

「そんな俗説を真に受けなくてください。竜の間ではまだ言われているんですか」

「確かめた者の話を聞かぬから、ウソかまことかわかるまい」

「胃腸薬だと思われて、常備薬代わりに連れて行かれたら迷惑です」

「ひとかじりすればわかるやもしれん」

「嫌です」

しばし、おじさんとポチがにらみ合う。その様子をキョロキョロと見ていたコニーは、びっくりして目を丸くしていた。

「すごおい！おじさんポチの言うことがわかるの！？」

## 魔術師がきた 後編

Side コニー

「コニーの母親の兄だというおじさんはすごいおじさんだった。なんとポチと会話ができるのだ！ポチがコニーたちの言っていることが分かっているのは知っていたが、ポチの言っていることが分かるなんて驚きだ、うらやましい、自分だっておしゃべりしたい！！」

「ね、ね、どうやったかわかるの？」

「魔力を使って会話をするんだよ」

「魔力ってナンだ？コニーは首をかしげる。

「そんな言い方じゃ分からないわよ、兄さん」

「なんだ、教えていないのかお前」

「母親とおじさんの会話に、コニーはまたもや首をかしげる。斜めになりすぎて首が痛い。」

「この村で魔術なんて教えてもしようがないでしょ、ポチちゃんとのことは追々考えるつもりだったのに、兄さんの気が早いのよ」

「手紙にあんなことが書いてあったら気になるだろう！？竜を拾ったんだなんて、そんな犬猫ではあるまいに！」

「だからヒマなときに見に来てねって書いたじゃない。だったら二年後くらいにくるかなあと思うじゃない？」

「コニーをそっちのけの母親とおじさんの会話に、コニーは飽きてきた。夕食の用意どころではなさそうであるし、外でポチと遊んでみようかと思っていると。」

「こらコニー、どこに行く」

「それに気付いたおじさんがコニーを引き止める。」

「だつてたいくつだし」

「ああ、悪かった。実は私はな、その竜を都に連れて行くこうかと考えているんだが」

「おじさんの言うことを、コニーはしばし考える。」



「竜って、ポチのこと？」

「そうだ、親を探してやれるし、竜としての一般常識も教えてやれる」

「ダメだもん！！」

ポチが都に連れて行かれる、コニーと一緒にいれなくなるなんて絶対反対である。

「ぜったいぜったいぜえーっつたいに、ダメだもんっ！！」

とられないようにと、コニーは腕に力を込める。ポチはその腕の中で痙攣を始めた。

そんなコニーの頭を撫でて、母親はコニーの援護をしてやった。

「ポチちゃんの親を探してやるって言っても、今までポチちゃん、親を恋しがったりする様子はちつともなかったけれど？」

そう、今まで親を探し回ることもなければ、夜鳴きすることもなく、のほほんとして親生活を楽しんでいたポチに、親に会いたいという気持ちがあるのか謎だ。ひよつとしたら三歩歩いたら忘れるニワトリのごとく、過去に縛られない生き物なのかもしれない。

「わかった。親のことは置いておこう。でも、その竜の丸さは問題だぞ。なんでそんなに太っているんだ？」

もつともともいえるおじさんの疑問に、母親がたしなめる。

「太っているなんて言い方ポチちゃんがかわいそうよ兄さん。これでも日々ダイエットに努めているんだから」

「これくらいが、気持ちいいんだよ。ほら！」

コニーにポチの尻を向けられても、どうすればいいのかわからないおじさんは、そのまるっとした尻をただ見ているしかなかった。

「わかった太ってはいいない。だが、同じ竜でないと教えてやれないこともある。都には魔術師と契約した竜がいる。その竜からいろいろ学べばだな」

「えー？今のままじゃいけないの？」

「いけなくはないかもしれないが、竜としてあまりに・・・」

語尾を濁したおじさん。そんなおじさんの味方をしようとしたのか、

はたまたまたまたま思いついたのか、それまで黙っていた父親が、ポンと手を打った。

「コニー、ポチはこれから大きくなっていくんだぞ。ポチが大きくなって、もっと上手に飛べるようになるれば、コニーを乗せて飛べるようになるんだぞ」

父親がそう言えば。

「そうねえ、コニーがお勉強をすれば、ポチちゃんとも話せるようになるわぁ」

「今みたいに、火を吹こうとしてむせたりもしなくなるかもね」  
母親とピートも、それぞれに言う。

「俺、ポチと一緒に飛んで、おしゃべりしたいっ！それにいっぱい火が吹ければ、いっぱい炭ができるね！」  
竜の炎を炭焼きに使おうという、なんともせこい家族であった。

S i d e 　ポチ

ポチがコニーに力いっぱい抱きしめられて気絶している間に、ポチの今後の勝手に決められていた。どうやら都に行くらしい。ポチとしては、このままこの村に住んでも少しも困らないのだが。ただ、もうちょっと高く飛びたいと思わなくもないし、火を吹くのに失敗して、口の中が煙くなるのをどうにかしたいとは思うが。

「ポチ、都でおいしいものを食べようね！」

それにどうやら、コニーも一緒に行くらしい。都の学校に通う傍ら、魔術の勉強をするらしい。コニーと会話ができるようになるといういな、とポチも思う。会話ができれば、寝ているときに自分を蹴飛ばすのをやめてくれと面と向かって言えるようになる。

「いいかいコニー、都では、おとなしく、そうっと、気をつけて、なんでも触るんだよ？物を壊してはいけないよ？」

ピートが心配そうに、何度も同じ事をコニーに言い聞かせているが、きっと明日になれば忘れているとポチは思う。

「楽しみだねえ、都！」

「うむ、都にはりんごのパイよりも美味なるものがあるだろうか」  
ポチの目下の気がかりは、この一点に尽きる。

コニーとポチを一緒に連れて行って、大丈夫だろうかと心配する魔術師だった。

## 都での生活 基礎編

Sideポチ

都とは、かくも美味なる誘惑の多い地なのか。ポチは通りを行き交う通行人に踏まれないために、コニーに抱え上げられていた。その腕のなかで、フンフンと鼻をならす。

「コニー、あちらからよいにおいがするぞ！」

キューー！と鳴いてある方向を示すポチにコニーも、

「そつちに美味しいのがあるそう？」

とそちらに歩き出す。言葉が通じなくとも、なんとも息のあう一人と一匹である。

「おお、これはメロンというのか！？南国の果物とな！」

「おいしいねえポチ」

美味しそうに食べる子供となにやら丸い生き物に、店のおばさんも愛想が良かった。

「こんなことばかりしているから太るのだ」

というコニーのおじさんの眩きも、ポチの耳はシャットアウトしていた。

都での生活で、ポチの趣味は食べ歩きであった。

Sideコニー

都はめずらしいものばかりである。

都は夜も明るい。魔術師が魔法のあかりを灯してるのだそうだ。

月のあかりじゃ足りないとは、都の人は目が悪いに違いないとコニーは思った。都に住む人々の格好も、なんだか毎日お祭りみたいに派手派手しい。きつと毎日なにか楽しいことがあるんだろう。そんなあまりに住んでいた村と違う光景に、コニーがちよっぴりホームシックにかかってしまったことはポチとの秘密である。

でもそんなことにも一ヶ月もすれば慣れてきた。休みの時間にポチと美味しいものめぐりをするのが、コニーの目下の楽しみである。しかし、どうしても慣れることのできないこともある。一つは、どうして都の人は歩くのが速いのかということだ。ただ普通に歩いているだけなのに、「ちんたらすんな！」と怒られたり、「邪魔よ！」と突き飛ばされたりする。都の人はそんなに急いでどこへ行っているのだろうか？一秒でも遅れると、すごく怒られるのだろうか？だとしたら都の人は短気な人が多いのであろう。

もう一つは、都の人はどうして早口で喋るのであろうか。コニーにとって、都の人の会話は、難解な早口言葉であった。そんな状態であるから、コニーと都の人との会話が成り立つはずもなく、端から自ら努力して会話をする気もないのであった。

こうやって、コニーは周りの空気が読めない人間になっていくのであった。

## Sideポチ

都のえらい魔術師が、大人の竜と会わせてくれることになった。別に頼んだわけではないのだが、ぜひ会ってくれと頭を下げて頼まれれば、会ってやらないこともないポチであった。

大きな広場で待っていると、空の向こうからばっさばっさと飛んでくる青い影がある。

「ふわー、おつきいね」

一緒についてきたコニーが、マヌケ面で口を開けて見上げている。太陽の光を反射してピカピカ青い鱗を光らせている竜が、どしんと地面に着地したときにコニーとポチの振動で体が揺れた。

地面に着地してもなお大きい。そばに建っている塔よりも大きい。正直見上げていると首が痛い。だが見にくいのはあちらも同じだったよつで、竜は腹ばいに伏せて、顔をぐっとコニーとポチに近づけた。

「丸いな、おまえ」

青い竜の一言目が、これだった。

「鱗の竜と違って毛深いせいで、丸く見えるだけである」

ポチは言い張った。自分は太っているのではない、毛深いだけだ。

そんなことよりも、ポチには大人の竜に尋ねたいことがあった。魔術師と会ってから、ずっと気になって仕方がない疑問が。

「魔術師の血は胃腸に良いというのは本当であるか？」

背後で、魔術師がずっこけている。

ポチの疑問に青い竜が答えた。

「滋養強壮に効くらしいぞ」

魔術師の効能で、確かめなければならぬ項目が一つ増えたのであった。

Sideコニー

大人の青い竜は大きかった。ポチとは違った鱗の竜で、ピカピカだった。あんまり犬っぽくない。でも登ったら楽しそうだった。でも鱗でつるつるして登りにくいかもかもしれない。

ポチは相手とおしゃべりできるみたいだ。「ガオー」「キュー」

「グルグル」「キュー」とよく分からない会話をしていた。なんて言ってたのか一緒にいた魔術師の人に聞いてみたけど、教えてくれなかった。ケチだ。

「あれが本来の竜の姿です、どうですか？」

そう魔術師の人が聞いてきた。ピカピカつるつるで、楽しそうだったけど、ポチの方が可愛い。そう正直に言っと、魔術師の人はがっかりしていた。疲れているのかと思い、ポチのお尻を撫でて癒してもらおうとコニーは考えた。

「ぶにぶにで気持ちいいよ？」

さあ癒されるとばかりに、コニーはポチを持ち上げてお尻を見せた。

魔術師はポチの尻を顔に突きつけられて、ただじっと見つめている

し  
か  
な  
か  
っ  
た  
。

都での生活 基礎編（後書き）

ユニーク2000越えていました！みなさまありがとうございました！！



## 都での生活 応用編

Side コニー

都の学校にも友達ができた。

友達の兄が、コニーの兄であるピートを知っていたらしい。聞くとなにやら有名人のような言い方をしていた。ピートはそんなことを一言も言っていなかった。

「へー、あのピートの弟、ほー」

と言ってコニーをじろじろながめ、友達の兄という人はずっと笑っていた。ピートが何をしたんだろうかと気になって尋ねてみたが、「ピートだって親兄弟に知られたくないことがあるだろうしな」とやっぱり笑っていた。知られたくないくらいに恥ずかしいことでもしたんだろうか。とつても気になるし、コニーには何でも話してくれるピートなので、今度手紙で聞いてみようと思った。

都の学校でも、ポチはずっと一緒だ。おじさんが言うには、ポチはコニーの「契約竜」だから、ずっと一緒にいてもいいのだそうだ。契約って何かと聞くと、ポチの名前をつけたことなんだそうだ。確かにポチにポチと名前をつけたのはコニーだ。母親に名前は何だと聞かれたので、ポチだと答えたのだ。それを聞いたおじさんは、「あいつめ、確信犯か・・・」とうなだれていた。

よくわからないけど、ポチとずっと一緒にいられるのは嬉しい。

Side ポチ

先日会った青い竜から、上手な火の吹き方を教えてもらうことになった。

火を吹こうとすると、たまに口の中が煙たくなってしまふ。ポチがそう告白すると、青い竜は

「おまえ不器用だな」

と言った。不器用とは何事か、他竜よりも、ちょっとだけやり方がまずいだけだ。

青い竜が口の中で煙を出さない方法を伝授する。

「よいか、息を吸うときに火を出そうとしてはいかん」

「うむ」

ポチはゆっくりと息を吸った。火はまだ出してはいけない。

「すった息を、思いつきり吐きながら火を出すのだ」

「む・・・」

ぶふうボスッ！

最初うまくいきそうであったが、すぐに煙が出てしまった。だが煙を口の外に出すことには成功した。

「・・・」

青い竜は不思議そうにその煙を眺める。

なんだ、自分が生まれたときから完璧な竜だったとも言っのか。己は子供なのだから、多少の失敗は寛容に受け止めてもよいであろうに。

ポチがふてくされていると、青い竜はそれを感じ取ったらしい。

「毎日練習すれば、そのうちできるようになるだろう」  
そうなぐさめてくれた。

ポチはできないのではない、断じてそうではない。

Sideコニー

おじさんに、ポチとおしゃべりする方法を教えてくださいらうことになった。

コニーがわくわくして待っていると、おじさんはヒモで繋がった二つのコップみたいなものを持ってきた。

「なにこれ？」

「これはな、竜の言葉がわかる魔法の道具だ！」

道具を手にとって首を傾げるコニーに、おじさんは胸を張って説明した。

おじさんが言うには、このヒモは魔力が通りやすいようになっていて、「ポチの言葉が聞こえますように」とお願いしながらコップの部分に耳を当てると、言葉が聞こえてくる仕掛けなのだそうだ。よくわからないが、要するにポチとおしゃべりできる不思議道具らしい。

「使いたい！」

片方のコップをポチに持たせたがコップが大きすぎるため、ポチは持つというよりもコップに頭をすっぽり入れていた。

そしてもう片方のコップをコニーが持つ。よし！と気合いを入れていざ。

「おーい、聞こえますかー？」

「いや、竜にはコニーの言葉はわかるだろう」

おじさんにつっこまれた。

「あ、そっか」

ファーストコンタクト失敗。

気を取り直して、ポチに何かしゃべるようにお願いする。

「我は高貴なる竜である。断じて犬ではない」

「なんか聞こえた！」

コップにすっぽりと頭を入れているせいか、多少声がモガモガしているのは仕方がない。ポチも言葉が通じたことが嬉しかったらしい。続けて何か言いたそうだったので、コップに耳を澄ます。

「我は好物は最後に食べるタイプである」

「そうなの？俺は最初に食べたいよ」

何となく付き合いで、コニーもコップに話しかける。

「なので、デザートの子ゴは最後の楽しみであって、嫌いで残しているのではない」

「わかった、ポチはイチゴが好きなんだね」

「うむ」

ずつと言いたかったことを言えて、ポチは満足そうであった。

コニーとポチから離れた場所でおじさんが、

「もっと先に話し合う話題はないのか」  
とうなだれていた。

慣れたら道具なしでも会話ができるそうだ。がんばるぞー！

## 都の学校の友人の証言

僕のクラスには「魔女」と「英雄」の子供がいる。

僕の兄の学生時代にも、お二人の子供がいたそうだが、彼はその弟らしい。お二人のことは大人の噂話でしか聞いたことがないが、彼のお兄さんのことは僕の兄から武勇伝を聞かされていた。

曰く、剣の達人であった。

曰く、因縁をつけてきた上級生を十秒で撃破した。

曰く、お城の王子様のマブダチである。

曰く、女生徒に人気でハーレムを率いていた。

他にも色々あったが、聞けば聞くほどどんな人だろうかと妄想が膨らんだものである。そんな人の弟が同じクラスに入るらしい。そんな話が流れてきて、ドキドキしながら彼を探した。

そして、見つけたのが彼だった。今でも忘れない。黒い饅頭みたいな生き物を抱えて、天使がうるうると廊下で迷子になっていたのを。明るい茶色の髪に青い目で、とっても綺麗な男の子だった。まるで彼が立っている場所だけスポットライトが当たっているかのようによく見えた。こんなに綺麗な男の子を初めて見たので、僕はしばらく彼をボーッと見つめていた。すると彼とぼつちり目が合った。それから彼は何を思ったのか、僕に近付いてくる。彼の腕の中で饅頭がもぞもぞと動いているが、彼は気にしないようだ。

おそろおそろ、彼に何をしているのかと話しかけると、教室の場所がわからないと答えた。説明を聞いてなかったのかと尋ねると、早口すぎて理解できなかったとのこと。同じクラスなので一緒に行こうと誘うと、彼は嬉しそうに頷いた。それ以来、彼に通訳認定されてしまい、彼に話しかけるには僕が窓口になってしまった。

彼が抱えていた黒い饅頭の正体も判明した。先生が、彼の抱えている饅頭は竜の子供で、彼の契約竜だと教えてくれた。饅頭ではなかったらしい。竜という生き物を実際に見たことないが、絵本に書

かかれているのはもつとこつ、少なくともスリムだった記憶がある。  
でもあれとは種族が違うのかも知れない。

彼の名前はコニーというらしい。コニーはとっても頭がいい。学校の勉強以外にも、家で魔術師になる勉強をしているらしい。学校の勉強だって、むずかしい算数の問題だってスラスラ解いてしまうんだ。

でも、天才とナントカは紙一重というけれど、コニーの思考回路はちょっと回転方向が斜めにずれていると思う。

いつもコニーは不思議な呪文を口にする。

「そうつと、やさしく、ていねいに」

何かしらの行動と起こす前に、必ずそう呟く。そして非常に動作が遅い。何かの儀式かと思つて尋ねると、物を壊さないように兄に教えられた合言葉らしい。後日明らかになったが、コニーは天使のような容貌に似合わぬ乱暴者だ。何も考えずに物をつかもうとすると必ず壊す。いつだったか、掃除の時間に初代校長の銅像の頭をもちでしまい（びかびかに磨こうとしたらしい）、コニーのおじさんという人が謝りに来ていた。それ以来、コニーには箒しか持たせていない。

それに、コニーは仲良くなった友達に、必ず竜のお尻を撫でさせる。竜に匂いを覚えさせて、襲わないようにするためであるうと先生が言っていた。本当なのかとコニーに尋ねると、

「だって気持ちいいでしょ？ 幸せは皆で分かち合わなきゃ」

らしい。確かに竜のお尻はぷにぷにしていた。

こんなコニーは、学校で一番の不思議ちゃんであつた。

## ポチ、おつかいに行く

Sideポチ

ある日、コニーが風邪をひいた。

朝起きると、ベッドでコニーが苦しそうに咳をしていた。あんまり苦しそうだだったので、誰かを呼びに行こうとポチは考えた。ふよふよと飛んで移動していく。

べちゃっ！

しかし、部屋の外へ出るには難所があった。部屋のドアを、ポチでは開けられないのだ。いつもコニーと一緒になので、ドアを開けられないことに、今初めて気付いたポチであった。

それからどうしようかと十分ほど悩んだポチは、部屋の窓ならば己でも開けられることに気付いた。ポチはよし！と気合いを入れて開けた窓から外をのぞく。

高かった。

コニーの部屋は二階なのだ。どうしよう、こんなに高い場所を飛んだことがない。しかし今苦しんでいるコニーを救わねば！何事も成せば成る！えいっとポチは外へ飛び出した。

落ちた。

竜というのは頑丈な生き物であるので、怪我などはしていないのだが、もつと飛ぶ練習をしようと思ったポチであった。

うまい具合に魔術師の部屋のあたりにまわりこんだポチは、窓にべっとり貼りついた。

「おい！コニーの具合が悪いのだ！早く見に行け！」

まだ寝ている魔術師が起きるまで、窓に貼りついていて。やがて物音で起きた魔術師は、窓に貼り付いている黒い物体を見て悲鳴をあげた。

「風邪だな。少し熱がある」

「コニーの様子を見た魔術師は、今日一日安静にしているように言い聞かせる。」

「えー、せっかくポチとおいしいもの食べに行こうと思ったのに、いつもよりも弱々しい声で、コニーは残念がった。」

「おいしいものならここで食べればよいだろう。あとで食べたいものを買ってきてやる。」

「むー……」

「コニーは不満そうである。そこで、ポチはひらめいた。」

「コニー、我が今日行くはずであった店で、焼き菓子を買ってこよう。」

「魔術師に任せては夜になるに決まっている。ポチが買いにいけば、お昼と一緒に食べられるだろう。」

「竜よ、お前が買いに行くのか？」

「そうだ」

「ポチの言葉がわからなかったコニーに、魔術師が通訳してやると、コニーはぱあっと表情を明るくした。」

「はじめてのおつかいだね、ポチ！俺モモも食べたい！」  
「ちゃっかりリクエストをするコニーであった。」

「魔術師にメモを書いてもらい、背中に買い物リュックを背負い、ポチは買い物に出かけた。村ではけっこう単独でふらふらしていたが、街にポチだけで出かけるのは初めてである。ふよふよと飛んでいく黒い物体を、通りをゆく人々はぎよつとした様子で避けていく。おかげで飛びやすかった。」

「まずは焼き菓子だな」

「コニーとよく行っている店に向かう。飛んでいる黒い物体に、店員も驚いていたが、すぐにそれがコニーの連れている竜であることに気付いた。」

「ポチじゃないの、今日はコニーと一緒にじゃないの？」

「コニーは具合が悪いゆえ、我が焼き菓子を買いにきたのだ」



キューキューと鳴いて、ポチは背中のリュックを店員に見せた。そこに買物メモと代金を入れてあるのだ。

「あら可愛いリュックを背負って、見ていいの？えーっと、焼き菓子がほしいのね」

店員はすぐに理解して、リュックに焼き菓子を入れてくれた。代金もちゃんととってもらった。

「次はモモを買いに行くのね、がんばってポチ！」

「うむ！」

キュー！と店員の応援に答え、ポチは次の店に向かう。

果物店はそこから近くにあった。

「なんでえ、ポチじゃねえか」

果物店の店主は、ポチに気付くとそう声をかけた。

「今日はコニーはいねえのか？」

「うむ！今日は我一人である。コニーがモモを所望しているのだ」  
キューキューと鳴いて、先程と同じようにリュックを見せる。

「ほー、モモがほしいのか。おつかいとはえらいなあポチ」

店主はポチの頭を撫でると、リュックにモモを入れた。焼き菓子がつぶれないようにとちゃんとしてもらう。ポチのがんばりのご褒美だと言つて、一つ多く入れてくれた。もちろん代金をちゃんとつてもらった。

「大丈夫か、ちいと重いぞ？」

「うむ！これくらいなんてことないのである！」

キュー！と店主に返事をして、ポチは尻尾をふりふり果物店をあとにした。

帰路で、ポチはリュックの重さのために高度をとれないでいた。三十センチほどの高さを浮いた状態で進んでいくポチは、何度も気付かない通行人に蹴られそうになる。だが、リュックの中身だけは死守してみせた。

「まっっているコニー、焼き菓子とモモをちゃんと買ったからな！」

危なっかしくふらふらと飛んでいくポチに、歩いた方が安全なのではないかと疑問を持った通行人たちであった。

「頼まれたものを買ってきたぞ！」

「ポチー！おかえり待ってたよ！」

窓から帰ってきたポチを、笑顔のコニーが出迎えた。

「わっ、リュックがぱんぱん。重かったでしょ？」

「我は竜であるからして、これくらいどうということはない」

強がりと言うポチを、コニーはぎゅーっと抱きしめた。愛情ゆえなのは理解できるが、内蔵が悲鳴をあげていた。

「ありがとうポチ！」

「うむ！」

ポチが買ってきた焼き菓子とモモは、昼食の後で一緒に食べた。

「次は一緒にいくぞコニー」

「今度は一緒に行こうねえ」

ポチとコニーは、同じことを言って笑い合った。

## 都での生活 実践編 前編

Sideコニー

今日は朝からポチはいない。

お友達の青い竜さんと、近くの山までピクニックに行くらしい。飛ぶ練習をしながら行くそうである。なにやら最近、ポチはもっと上手に飛べるようになるための特訓をしていた。おじさんの家の屋根から飛んでは落ちてを繰り返していた。お陰で黒い毛が灰色になり、ポチを拾ったときの毛玉を思い出したコニーであった。

最初は何か新しい遊びを始めたのかと思っただら違ったらしい。上手に飛べるようになったら、きっとコニーだってピクニックに誘ってくれるだろうと思う。

そんなわけで、コニーは朝から一人で学校に行っていた。ポチがいないと通学途中もおしゃべり相手がいなくてつまらない。けれどもポチだつてがんばっているのだから我慢である。

「そうだ、歌いながら行こうつと」  
つまらない道のりを楽しくする良いアイデアのように思われた。

「あゝるゝはれたゝひゝるゝさがりゝいゝちゝばゝへつづゝくみち  
」  
「ドナドナドゝナゝドゝナゝ」  
けつこうな音量で歌い始めたコニーを、道行く人はぎょつとして振り返る。

コニーが歌っているのはあの有名な、荷馬車で子牛が売られてゆく歌である。朝のさわやかな時間に歌う歌ではない。まさに市場の通りを抜けながら歌うには、なんとも場違いで哀愁を漂わせる歌である。周囲の通行人も、歌をきいて重苦しい気持ちを抱負って歩いている雰囲気である。周囲を巻き込んだ、完全にコニーの選曲ミスであるが、本人は全く気にしていなかった。

そんなコニーの頭上を、突然大きな影が覆った。

「あれ？」

コニーは急に暗くなったので、ビックリして歌うのをやめた。通行人たちが歌がやんだことにホッとした様子であった。

コニーが上を見上げると、何やら白いふさふさしたものが視界一面に入ってきた。

「おや、このあたりでうちの坊やの匂いがしたはずなんだけどね」  
頭上から声がして、白いふさふさがコニーに迫ってくる。

「むぐっ……」

白いふさふさに埋もれてしまったコニー。

「あらら、何かいたようだね。ごめんよ」

白いふさふさはコニーに気付いてどいてくれた。白いふさふさは声の主であるらしい。全体像が見えないので、コニーは見えるまで後ろに下がった。

「つぶしてしまつてごめんよ、人間の坊や」

そこにいたのは、白いふさふさの、

「……でっかい犬」

ポチを大きくしたような生物であった。どうやらコニーを圧迫していたのはこの白いふさふさな大きい犬のお腹であつたらしい。

このとき、都は未確認の竜来襲の知らせで大騒ぎであつた。

## 都での生活 実践編 中編

Sideポチ

ポチは青い竜と一緒に近くの山まで来ていた。近くといってもそれは竜の感覚で、人間では往復一ヶ月の旅になるであろう。

なにゆえこの山まで来たのかというと、ポチの飛行訓練につきあっていた青い竜が、

「ここではなく、もっと風の強い場所でした方がよいかもしれんとアドバイスしてくれたからだ。」

そんなわけでポチは青い竜の背に乗って、特訓場まで移動した。引越し途中に親の背中から落ちたのは未だ新しい記憶である。なので今度は落ちないように、ポチはしっかりと青い竜の背中に爪を立ててしがみついていた。

特訓場で、ポチは青い竜から高く飛ぶコツを教えてもらった。

「よいか、高い場所を飛ぶには強い風がある。お前は他の竜の子に比べて少々丸いゆえ、より強い風がいるのだ。」

どうやら高ければ高いほど、強い風で飛ばねばならないらしい。この特訓場は最初から強い風が吹いているので、ポチでも飛べるだろうということであった。

「万が一落ちたとしても、竜は頑丈にできている。どうということはあるまい。」

自分ではないと思って、勝手なことを言う青い竜であった。

「よし！ではやるぞ！」

少々高い崖の上から、ポチは思い切って飛び出した。

「おお！いいカンジである！」

ポチは上手い具合に風にのれたようである。しかし。くるくるくるくる

ポチは強い風にのれたのはいいが、その風の渦の中で回りはじめて

しまった。

「お前、風に遊ばれているぞ」

特訓の道のりは、けっこう遠いようである。

S i d e コニ一

コニ一が学校についたとき、学校は大騒ぎになっていた。

なにやら白くて大きいものが学校を目指して歩いてくれば、騒ぎにもなるだろう。

しかし、白くて大きいものをつれてきた当の本人は、その騒ぎの原因が全くわかっていなかった。

「コニ一！その、いや、そちらの竜はなんなのだ！？」

見知った先生が、すごく遠くから問いかけてくる。なんで近くまで来ないのだろうかと思議に思いつつも、コニ一は先生まで届くように大きな声で答えた。

「せんせー、こっちの白いふさふささんは、ポチのとーちゃんです！」

そう、通学途中で遭遇した白い大きなふさふさの生き物は、ポチの父親だったのだ。ポチに会いにきたらしいのだが、あいにくとポチは友達の青い竜とピクニックにでかけている。そう伝えると、ポチの父親はすれ違ってしまったことがショックでしょんぼりしてしまった。その姿はあんまり可哀相で、コニ一はうっかりおやつを落として食べれなくしてしまったポチの姿とダブった。コニ一と一緒にいればそのうち会えると伝えると、一緒に待つとポチの父親が言ったので、学校で一緒に待っていることにしたのだ。

ちなみに今コニ一がどこにいるのかといえば、ポチの父親の背中の上である。コニ一は背中白い毛に埋もれそうになっていた。

ポチの父親は学校という場所に興味津々である。

「うちの坊やはいつもここにきているのかい？」

「そうだよ、俺と毎日学校にくるの」

父親は子供の生活ぶりが気になるらしい。コニ一はせっかくなので

今日一日ポチの父親と一緒に行動して、ポチの一日を体験してもらおうと考えていた。

「邪魔はしないから、一日よろしくたのむよ」

「今日と一緒に勉強するんだー」

「・・・はあ」

ポチの父親の言葉を通訳したコニーに、先生はひきつった笑みを浮かべた。

## 都での生活 実践編 後編

S i d e ポチ

特訓の成果は、あつたといえばあつたし、なかつたといえばなかつた。

少なくとも、ポチは風にのるといことがへたくそであるということがわかった。ポチのあまりのみそつかすぶりに、青い竜は同情を禁じえないでいた。

「お前の親竜は、どのような竜なのであろうな」

親の教育が悪いのか、はたまた親もポチに劣らず不器用な性質なのか。ポチがコニーと一緒にいるようになったいきさつを聞くと、後者のような気がする青い竜であつた。

「そろそろ帰るか、コニーが心配するゆえ」

「・・・腹が空いたのである」

がんばりすぎてエネルギー不足を起こしたために一歩も動けないポチを、仕方がないので青い竜がくわえて飛んでいくのであつた。

S i d e コニー

ポチが帰ってきた。

最初はポチがどこにいるのかわからなかったが、青い竜がくわえている灰色毛玉がポチだと気付いたのは、毛玉が腹の虫を鳴らしたからである。

「またばつちくなつたね、ポチ」

灰色毛玉となつたポチを、つんつんとつつくコニー。

「何度も崖から落ちたゆえな」

話す元気もないポチの代わりに、青い竜が説明する。ピクニツクで崖から落ちるなんて、途中で遭難でもしたのだらうか。それはさぞサバイバルなピクニツクであつただらう。

「ポチ、ご飯の前にお風呂に入らうね」



ポチは答える代わりに尻尾をふりふりしていた。

「ところでコニー、後ろの白い竜はどなたかな」

青い竜は、コニーの後ろにずっといたポチの父親のことを尋ねた。ポチの父親は、何かにひどくショックを受けている様子であった。

「お待たせ。これがポチだよ」

「・・・丸い。姿のよさで定評のある我が一族の子が」

デカイ図体でよよよ、と泣き崩れるポチの父親。背後で泣かれると非常に鬱陶しかった。

「えー、これくらいがぼちゃつとしてて可愛いのに」

コニーの好みの体型を維持しているポチのことを、ポチの父親はお気に召さなかつたらしい。

「文句を言うな、そもそも落として気付かなかったお主が悪いのだ」  
青い竜も鬱陶しかったらしい。白い竜をしっかりとつけてくれた。

「今日は竜の子も疲れているゆえ、こやつは我が連れて行こう」

「ほんと？助かつちやった」

「我が子よ〜」

めそめそしているポチの父を、青い竜が蹴飛ばしながら飛んでいった。

その様子をコニーはしばらく眺めていたが。

「帰ろうかポチ」

「腹が減ったのである・・・」

灰色毛玉なポチを風呂に入れるべく、コニーはよいしょと抱えておじさんの家に帰っていくのであった。

Sideポチ

特訓明け、ポチは父親とようやく対面した。

「息子よ〜！！」

食べられそうな勢いで突進してくる父親を、とりあえずポチは避けた。

どしーん！

結構な地響きを起こして、父親は正面の森に突進してこけた。

「どうして避ける!？」

「つぶされるのは嫌であるゆえ」

木の葉を体中につけた父親に、冷めた返事をするポチ。

ちなみにコニーは立会竜である青い竜と一緒に離れた場所で見物していた。

「父との再会がうれしくないのか我が子よ!？」

体中木の葉まみれの姿の白い竜が、涙で目をウルウルさせてもドン引きするばかりである。

だが、ポチはここで大切な決意を思い出した。

「ああそうだ、父よちよつと伏せるといい」

ポチがお願いすると、父親はしゅたつと伏せた。その姿はまさしく犬であった。

ちようど目の前にきた父親の顔の、鼻っ面目掛けて、ポチは思いつきり火を吹いた。

「あちいつ!こげる!！」

父親はきゃんきゃん騒いで、ちよつとだけ燃えた鼻先の毛に息をふーふー吹きかける。

「何をする我が子よ、一族でも見目良いと評判の私の顔に!」

父親はちよつとナルシストが入っているらしい。

しかしそんな父親を、ポチはジト目で睨む。

「よくも我を落としたばかりか、誰も助けにこなかったな」

落とした方は忘れても、落とされた方はあのとときの恨みは忘れなかった。

「おお、成功したな」

上手に火を吹けたポチを、青い竜が褒めていた。

その後、すごすごと帰っていくポチの父親を眺めながら、結局何をしにきたのであろうかと首を傾げるコニーなのであった。

都での生活 実践編 後編（後書き）

ユニークアクセス1000人突破、ありがとうございます！

## 青い竜の証言

ある魔術師から、長毛種竜の子供を教育してほしいと頼まれた。何でも幼くして親竜と別れた子供なので、「竜らしくない竜」らしいのだ。現在人間の子供に拾われて、一緒に生活しているらしい。

竜という生き物に対して人間の間では、不老長寿の薬だとかいろいろ俗説がある。その代わりに、竜の間でも魔術師に対する様々な俗説が流れている。いわばおあいこのようなものである。

こういった事情もあり、人間に拾われるというのは不幸なことではないかと考えたが、幸いなことに、拾ったのは都で有名な魔女と英雄の家族であるとのこと。竜という生き物について、他者よりも詳しい家族なので、危害を加えられるようなことにはなっていない。何よりである。

そして、連れて来られた竜の子と会った。

丸かった。確かに竜らしくない丸さである。

竜というのは切り立った山を棲みかに行きが多い。それが人間と共に平地に住んでいるため、運動不足であるのだろう。その上生活の中で必要がなかったのか、火を吹くのも飛ぶのも下手であった。

それに人間との生活に慣れたせいも、人間の食べ物を好んだ。毎日人間の少年と同じものを食べているらしい。好物は一緒に暮らす人間の子供の母親が作る、りんごのパイだそうだ。なんとも贅沢な食生活である。

確かに、魔術師の言うとおり、これほど竜らしくないが人間らしい竜はいないであろう。だが竜の子供も、せめて火を吹くことと飛ぶことをもつと上手になりたいらしい。なので、少々特訓をつけてやることにした。

が、この竜の子供はとんでもなく不器用であった。この竜の子供

の親竜は、生まれたばかりの我が子に何を教えていたのだろうと疑うほどに。聞けば、親竜とはぐれたきつかけは、引越し途中に親竜の背中から落ちたことらしい。その上落ちたことに一族の誰も気付かなかつたらしい。そのようなマヌケな親竜ならば、あまり期待してはいけないのかも知れない。

竜というのは生まれた瞬間から教育が始まるほどに教育熱心な種族である。なのに、火を吹くことに失敗して煙を吹く竜を見たのは初めてである。同じ竜として見過ごせない不器用ぶりだった。一般教養的知識は人間でも教えてやれるが、火を吹くことと飛ぶことは、竜にしか教えられないことである。これを教えるには時間がかかりそうである。救いなのは、本人(?)は一生懸命であるということであろう。

後日、知り合いの竜に声をかけて探してもらった親竜がやっと捜しにきた。なんと、教えてもらうまで我が子が一匹足りないことに気付いていなかったらしい。このようなマヌケな親竜から早く巣立たたことは、この竜の子供にとって幸いなことであつたのやもしれない。

## 帰宅

Side コニー

「コニーは二年間の都生活を終えて、村に帰ってきた。」

「カーちゃん！ただいま！」

「コニーは外で待つていてくれた母親のもとへ飛び込んでいく。後ろから、ふわふわとポチも飛んでくる。ちなみにこの二年で、ポチは身体も成犬ほどの大きさになり（それでも丸いのだが）、ニメートルの高さを飛べるようになった。高度が倍になったのは進歩だと思う。」

「コニー、ポチちゃんもお帰りなさい」

母親はにこにこ笑ってコニーを抱きしめた。

「それにしても、すごい乗り物で帰ってきたのねえ」

母親がちよつと離れた場所を眺める。

「あのね！帰りはびゅーんて速かったよ！アオさんが送ってくれたから！」

アオさんとは、ポチの友達の青い竜のことである。コニーとポチが村に帰るのだと告げると、送っていつてくれると申し出てくれたのだ。

「人の足では遠かるうが、我の翼であればひとつとびだからな」

「親切な青い竜に、コニーはお礼を言った。」

「ありがとー、アオさん！後でカーちゃんにりんごのパイを焼いてもらって、一緒に食べようね！」

「たくさん焼かなきゃいけないわね。ところでコニー、もうひとつ聞きたいのだけど」

「にこにこ笑顔な母親に、コニーは首を傾げる。」

「あつちの白い方はだあれ？」

「ああ、アレは景色だと思っただけだよ」

母親に疑問に答えた青い竜の言い草に、「白い方」は拗ねて石ころ

を蹴っていた。石ころといっても、人間の子供ほどの大きさの岩であるが。

「あのねー、あれポチのとーちゃんなんだよ！」  
続いてコニーが答えた。

コニーの帰郷に、ポチの父親もついて来ていたのであった。2匹の竜がいるおかげで、村が狭く感じるコニーであった。

Sideポチ

コニーが村に帰ることになり、ポチも一緒に帰ることにした。そう青い竜に告げると、コニーの家族が住む村が見たくなったらしい。青い竜は村まで送ってくれるという。人間が移動するにはとても遠い場所にある村なので、送ってくれるのは正直ありがたかった。

が、しかし。この帰郷にオマケがついてきてしまった。話をききつけたポチの父親が、自分も行くと言ってきたのだ。

「我が子が世話になったお礼を、親である私がせねばなるまい！」  
「いらぬ世話である」

ポチの父親は鼻っ面を燃やされただけでは懲りなかったらしい。定期的にポチに会いに都までやってくるのだ。村の場所が知れたら、そこへも現れるに違いない。

なんとというか、ポチとこの父親とでは、性格の不一致というか、馬が合わないところがあった。一緒にいてイラっとするという表現が正しいのかもしれない。妙にナルシストなところも気に入らないポチであった。きつと己は母親に似たのだとポチは思う。

そんなこんなで、行きは苦労した道のりも、帰りは青い竜ののってひとつとびであった。コニーが空の旅を大いに楽しんでいたので、ポチとしても安心である。これで乗り物(?)酔いを起こしては、二度と竜にのりたがらなかつたかもしれない。そもそも青い竜ののって帰るとい話になったのも、行きの道のりで、コニーが乗合馬車にひどく酔ったことが原因であるのだ。

村の端の開けているところで、竜三匹とコニーは仲良くりんごのパイを食べていた。

「やはりこのりんごのパイが一番美味である」

「誰でもいろいろ食べたけど、やっぱりカーちゃんを作ったのが一番おいしいね」

ポチとコニーは久しぶりの味をかみ締めていた。

「ふうむ、なかなかおつな味だな」

「我が子はこのようなもので餌付けされたのか」

大人の竜向けに、超巨大なりんごのパイを焼いてもらい、青い竜とポチの父親も食べていた。初めて食べる人間の味に、二匹は夢中で食べている。

「気に入ったらまた遊びにくるといいよー」

「父はくるな」

どこまでも冷たい我が子の仕打ちに、ポチの父親はいじけていた。そういう態度が嫌われるのだと、ポチの父親はなかなか気付かない。

「やっぱりおうちが一番だね！」

「うむ！」

仲良しのコニーとポチは、りんごのパイを口いっぱい頬張って、そう言うてにっこり笑い合うのだった。



## 帰宅（後書き）

これにて完結です。読んでいただきありがとうございます！ここで連続投稿はストップさせていただきます。しかしコニーとポチのお話はまだ終わりじゃないですよ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8817t/>

---

迷子の竜、都に行く

2011年6月17日22時07分発行